

第3章 遺跡の立地と層序

第1節 遺跡の立地

1 遺跡の立地(第8図)

大山北麓には広大な火山麓扇状地が展開しており、下市築地ノ峯東通第2遺跡はその一角に位置している。この火山麓扇状地は、開析谷によって分岐を繰り返しながら、緩やかに標高を下げつつ北に延びる台地状のなだらかな丘陵群によって構成されている。こうした丘陵群の大半は地形区分では台地に分類されており、遺跡が所在する丘陵群は「二本松台地」と命名されている(鳥取県1974)。

二本松台地の東西には、2本の中規模河川が北に向かって流れている。西が宮川、東が下市川で、両河川とも丘陵北端を過ぎて間もなく日本海に流れ込んでいる。これらの河川とその支流によって丘陵の開析が進んでおり、遺跡周辺は支丘陵と谷が細かく入り組んだ複雑な地形となっている。

遺跡周辺では、宮川と下市川の間大きく見て2つの北に延びる丘陵が並んでいる。宮川の東に下市築地ノ峯東通第3遺跡が所在する支丘陵が、その東に下市天神ノ峯遺跡が所在する。支丘陵がそれぞれ位置しており、その間にはくずくし川と呼ばれる谷川が蛇行しながら北流している。下市築地ノ峯東通第2遺跡は、西側の下市築地ノ峯東通第3遺跡が所在する支丘陵の東にさらに派生した小丘陵とその東側の谷部に立地している。

2 調査地の地形

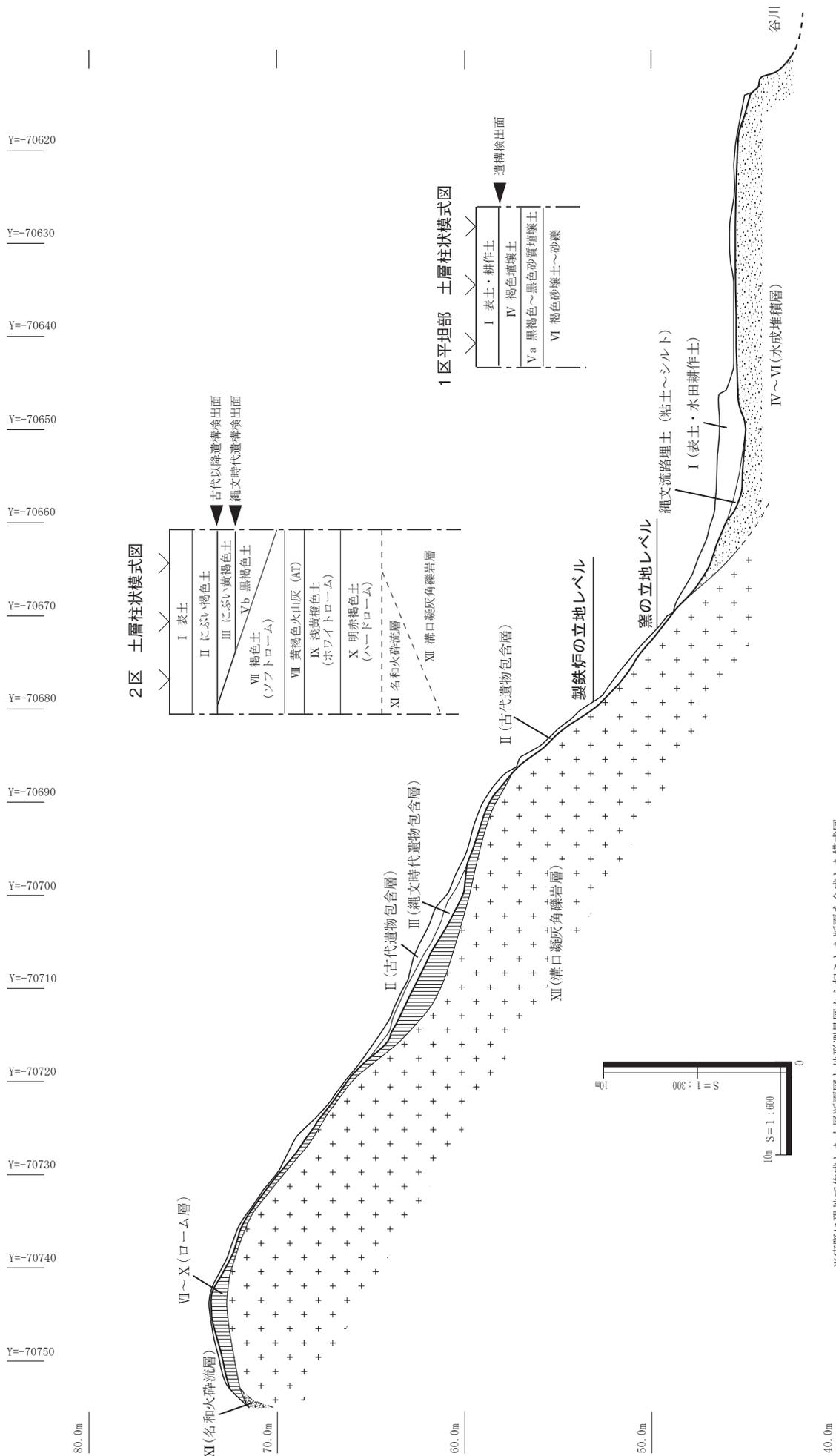
調査地の地形は丘陵部分と谷部分からなる。丘陵頂部は平坦面幅10mほどの痩せ尾根で、標高は尾根上で約73mである。尾根頂部から東西に向かって急傾斜の斜面が見られる。西側斜面は一定の傾斜を保って下っており、下市築地ノ峯東通第3遺跡が所在する丘陵との間に谷を形成している。その谷底には幅1m前後の細く水量の少ない谷川が北流している。なお、西側斜面の肩部以下は調査範囲外となっている。東側斜面は西側斜面と異なり、急傾斜で下る斜面が標高65m付近から一旦緩くなり、標高64mから58mの間でテラス状の地形を形成している。この東斜面テラス部から東側は再び急傾斜となり、丘陵東に広がる谷底の平坦部まで急斜面が続く。谷部は標高約44~48mの段丘状の平坦地で、東側に谷川(くずくし川)が弧を描きながら流れている。

調査地は地形を基準に東西2つに分けており、丘陵東斜面テラス部よりも東の斜面から谷部にかけてを1区とし、丘陵東斜面テラス部以西の丘陵部を2区とした。調査地内の地目は1区、2区とも針葉樹の植林された山林であった。ただし、1区の谷底平坦面は植林以前には棚田として利用されていたようで、全面に大幅な削平を受けていた。

第2節 調査地内の堆積

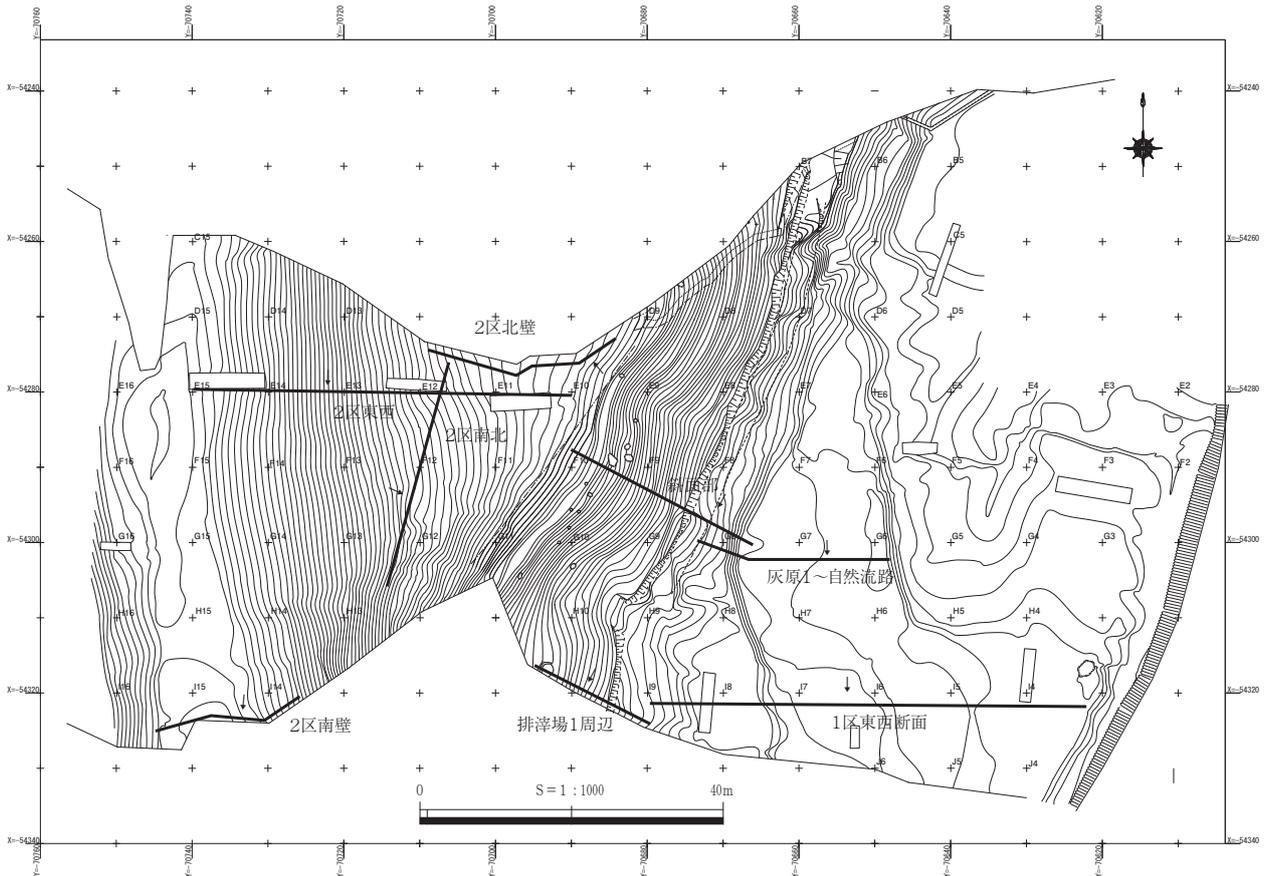
1 調査地の基本層序(第9~16図、PL.5)

調査地内の丘陵部分(2区・1区丘陵斜面部)は火山碎屑物を主体とする堆積層を基盤層とし、谷底部分(1区平坦部)は水成堆積の砂礫層を基盤としている。この基盤層の上に、その二次堆積物を主体とする層が堆積している。したがって、丘陵部と谷部では堆積層の大部分が異なっているものの、両者を通して堆積順を整合的に確認できたので、調査地内の基本層序すべてに通し番号の層名を付した。I層が表土・耕作土、II層が古代の遺物包含層、III層が縄文時代の遺物包含層、IV層以下が基盤



第9図 調査地内基本層序模式図

※実際に現地で作成した土層断面図と地形断面図から起こした断面を合成した模式図。
 2区はX = -54280 (Eライン)、1区斜面部はX = -54300 (Gライン)、1区平坦部は
 X = -54322 (Iライン付近) を基準に作成しているが、厳密な断面図ではない。



第10図 調査前の地形と土層断面位置図

層である。以下に各層の特徴を示す。

I層：表土・耕作土。調査地全面に森林性の腐植土が堆積する。1区平坦部では、その下層に棚田として利用されていた際の耕作土と判断した灰褐色シルトが堆積する。

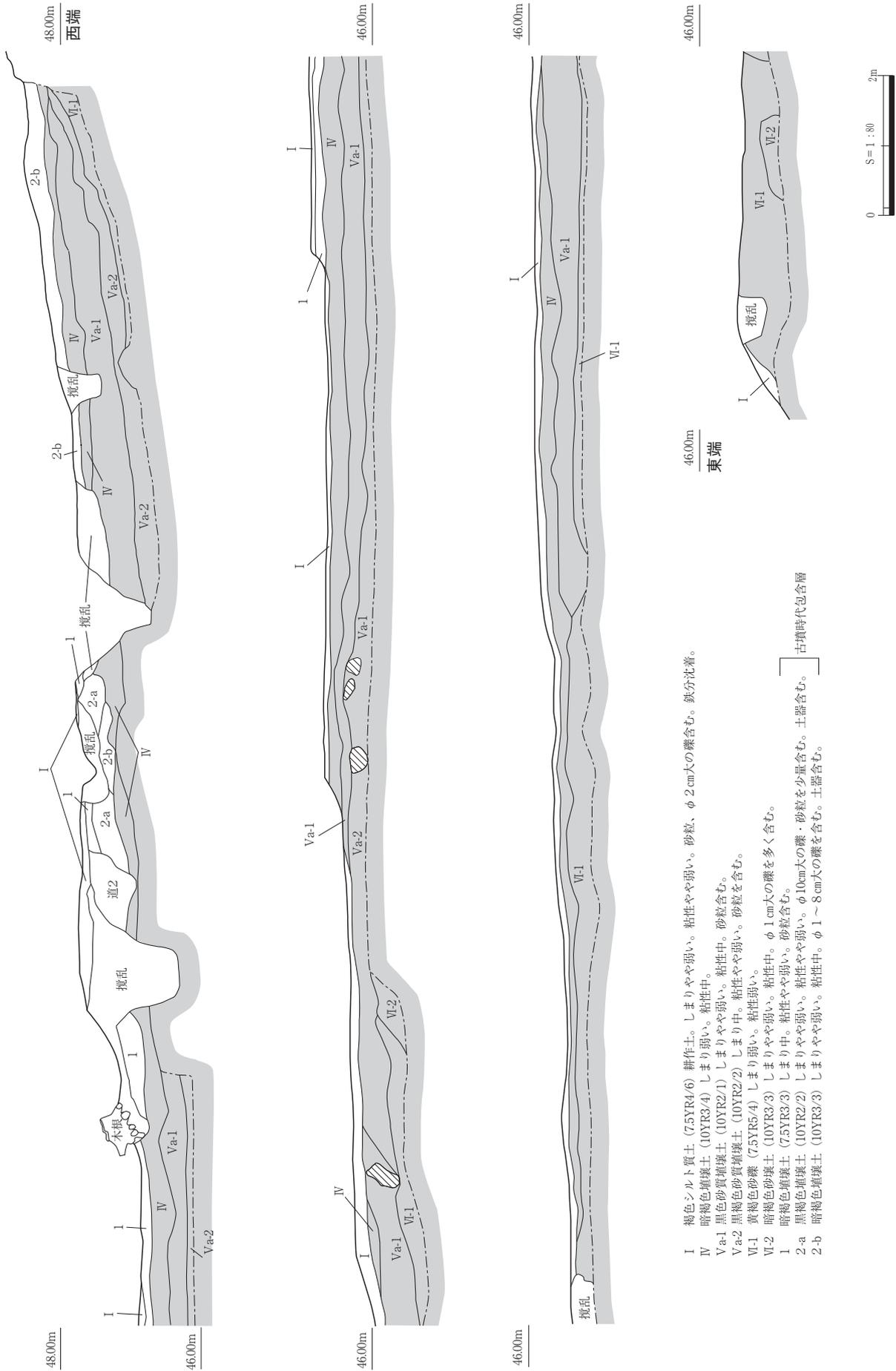
II層：にぶい褐色(7.5YR 3/4)土層。丘陵部分(1区丘陵斜面・2区)のみに堆積する。古代の遺物を包含する。主としてIV層などのローム層を母材とする流土堆積である。II層堆積範囲では、下面で古代の遺構を検出した。

III層：にぶい黄褐色(10YR 4/3)土層。2区東斜面テラス部分を中心に堆積する縄文時代遺物包含層。II層と同じく、ローム層を主な母材とする流土堆積層。III層堆積範囲では、下面が縄文時代の遺構面相当面となる。

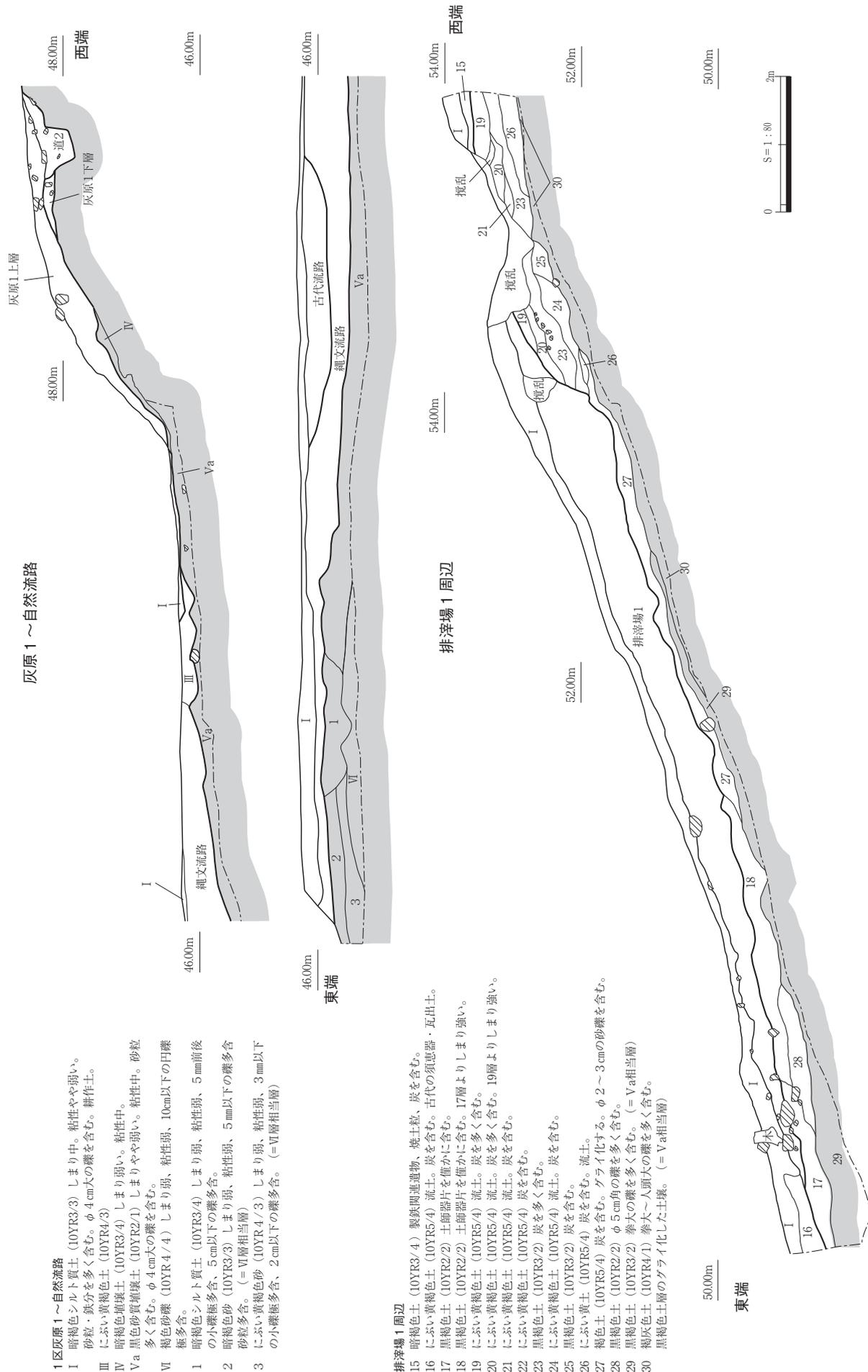
IV層：褐色(10YR 4/3)の埴壤土層で、安山岩のクサレ礫を含んでいる。1区平坦部に堆積する無遺物層で、基盤層と判断した。主にX II層を母材とする、丘陵斜面からの流土による堆積と考えられる。1区平坦部では、この層の上面が古代および縄文時代の遺構検出面となる。

V層：1区平坦部と2区東斜面テラス部に堆積する無遺物の黒色土層。前者をVa層、後者をVbとした。Va層は黒色(10YR 2/1)から黒褐色(10YR 2/2)の砂質埴壤土で、径0.2~5cmの礫を多く含む。Vb層は黒褐色(7.5YR 3/1)の埴壤土で、礫はほとんど含まない。両者は土性が異なるが、色調と上下の堆積層との関係から同時期の堆積と判断した。おそらく、両者ともクロボクを母材とした流土堆積と考えられるが、Va層はさらに強い流水による運搬を経た堆積層と考えられる。

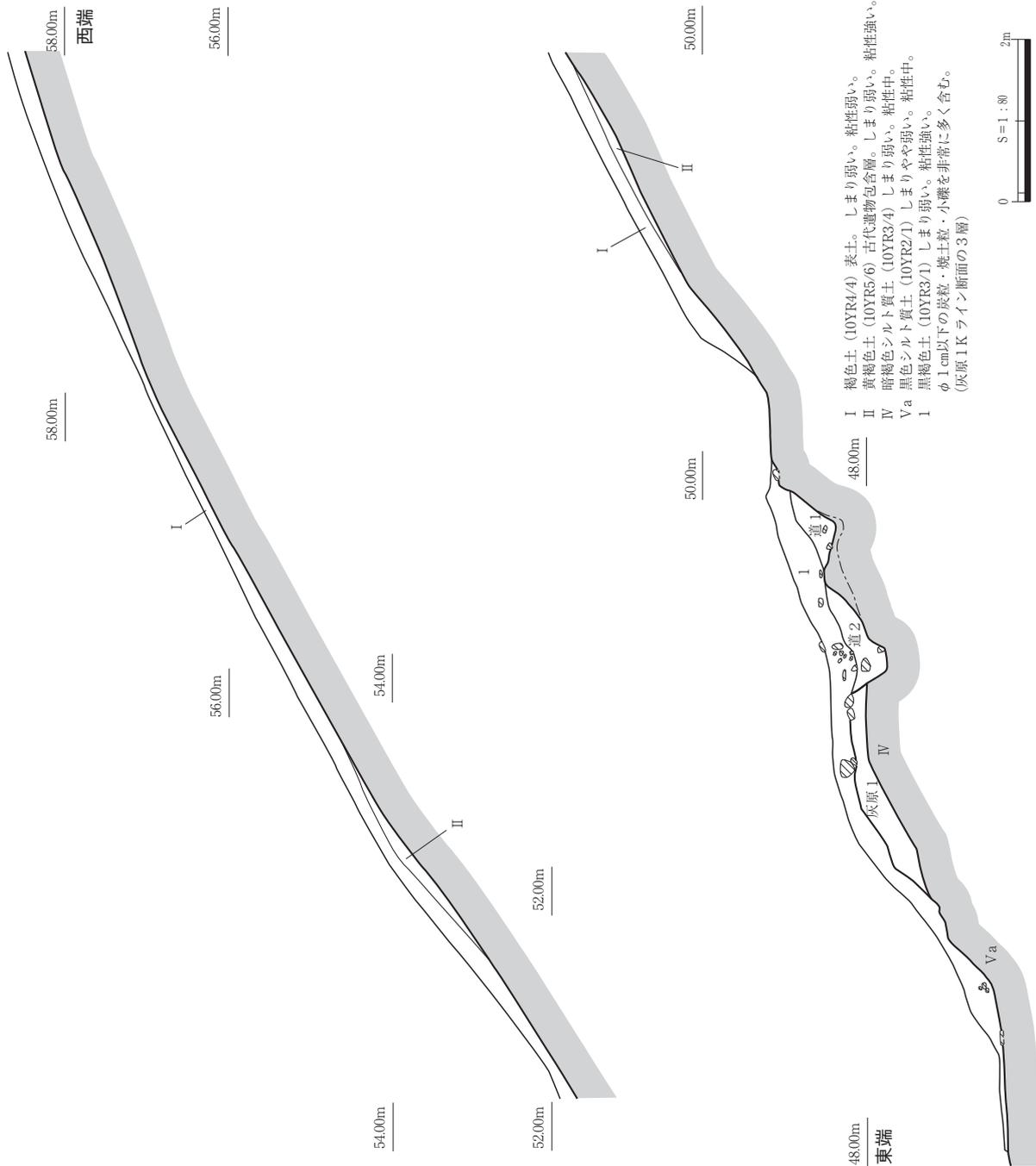
VI層：安山岩の大小礫を多く含む黄褐色(7.5YR 5/4)から褐色(10YR 4/4)の砂壤土または砂礫層。1区平坦部全体に堆積する。くずくし川によって形成された河川性堆積物層と考えられる。



第11図 1区平坦部土層断面図



第12図 1区灰原1～自然流路及び排滓場1周辺土層断面図



第13図 1区斜面部土層断面図

VII層以下は丘陵部分で確認できた、火山碎屑物堆積層(いわゆるローム層、火山灰層など)である。

VII層：褐色(10YR 4/6)土層。いわゆるソフトローム層。始良丹沢火山灰(AT)層ブロックを含む。

VIII層：明黄褐色(10YR 6/6)火山灰層。始良丹沢火山灰(AT)層である。

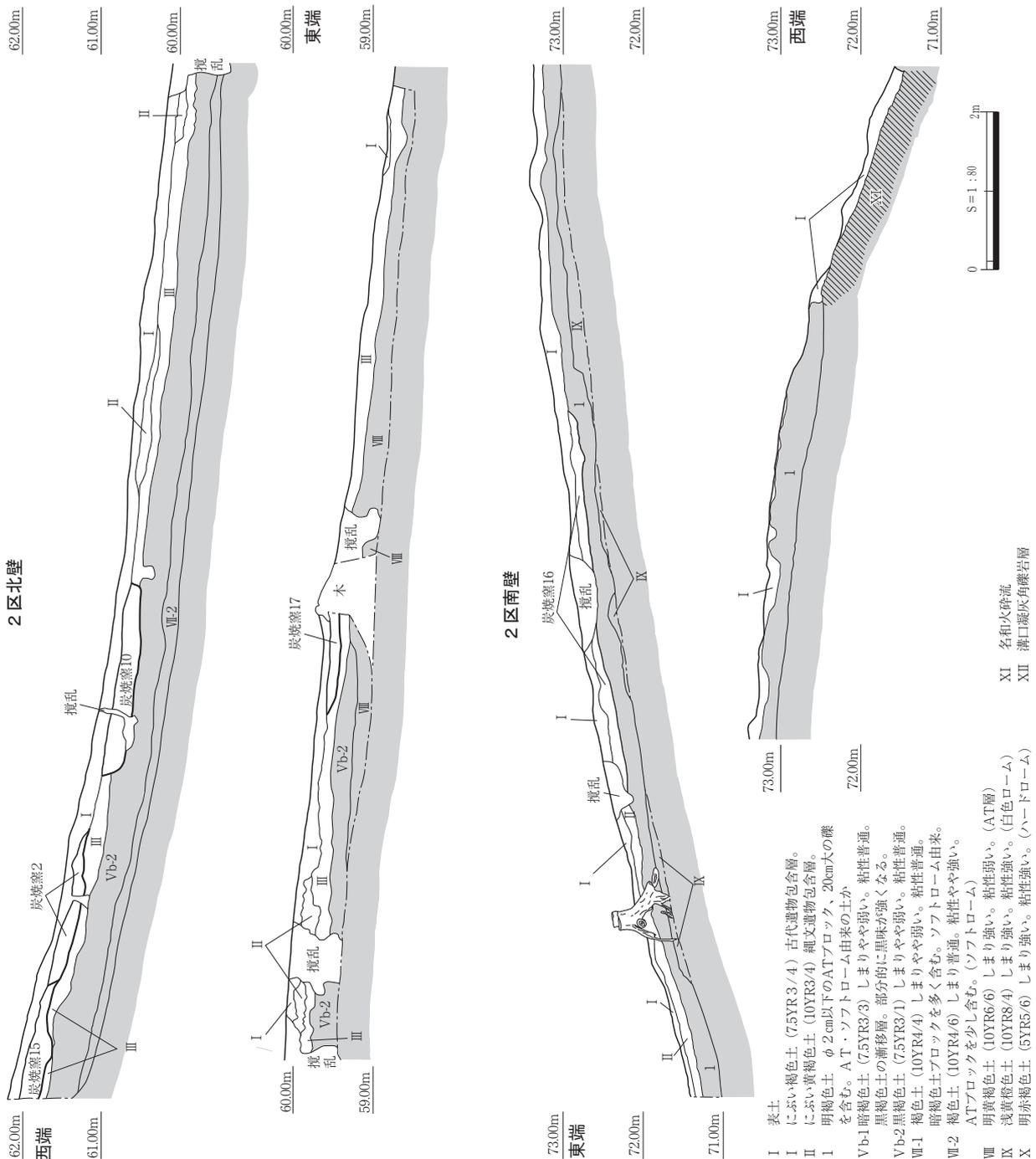
IX層：浅黄橙色(10YR 8/4)ローム層。いわゆる白色ローム層。

X層：明赤褐色(10YR 6/6)ローム層。いわゆるハードローム層。

XI層：名和火碎流層。デイサイト質の石質火碎流層で、デイサイト・角閃石安山岩などの小礫から



第14図 2区東西土層断面図



第15図 2区北壁・南壁面土層断面図

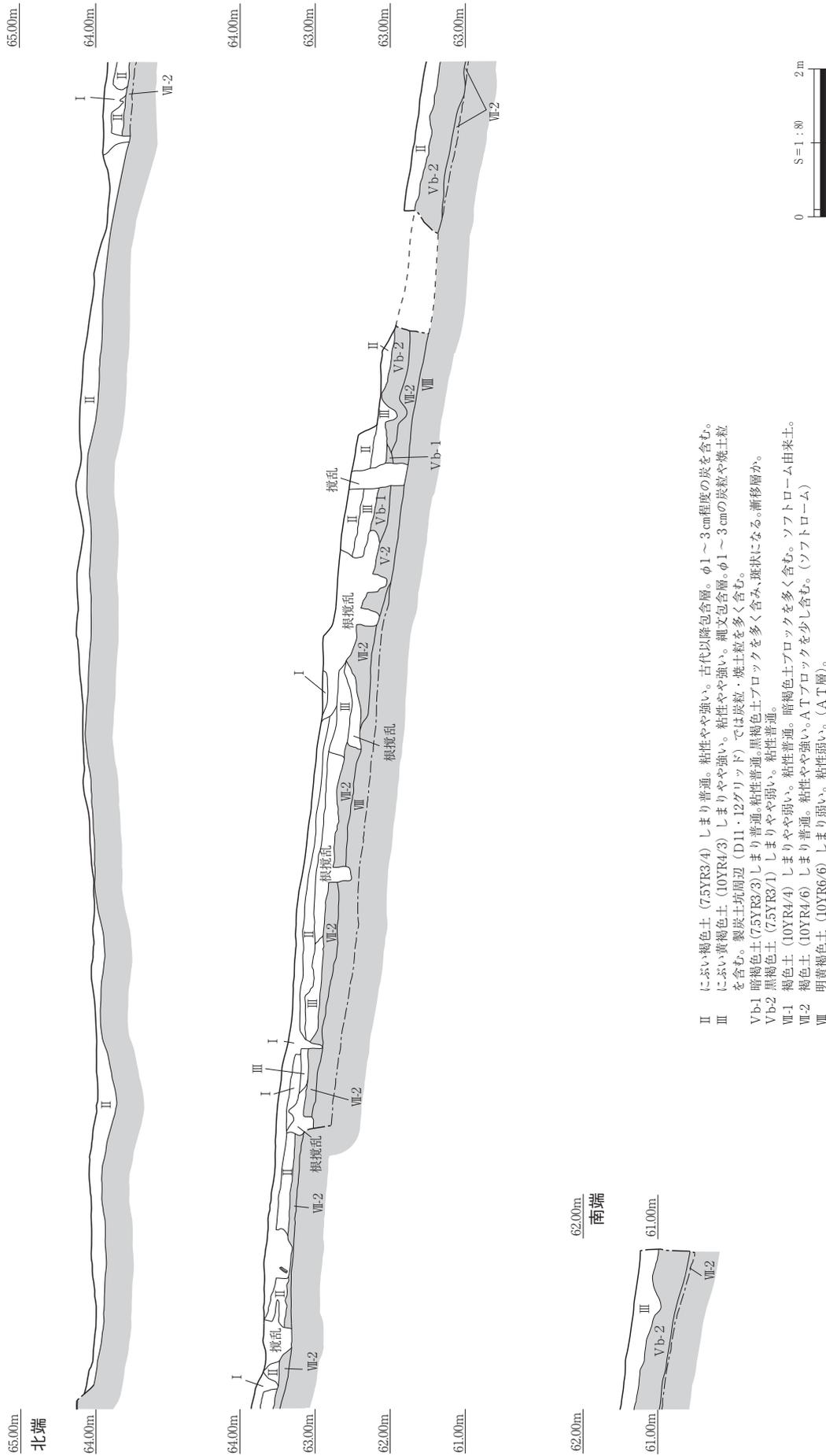
- I 表土
- I 1 濃い褐色土 (7.5YR3/4) 古代遺物包含層。
- II 1 黄褐色土 (10YR3/4) 縄文遺物包含層。
- I 1 明褐色土 φ 2cm以下のATブロック、20cm大の礫を含む。AT・ソフトローム由来の土か。
- Vb-1 暗褐色土 (7.5YR3/3) しまりやや弱い。粘性普通。黒褐色土の漸移層。部分的に黒味が強くなる。
- Vb-2 黒褐色土 (7.5YR3/1) しまりやや弱い。粘性普通。
- VI-1 褐色土 (10YR4/4) しまりやや弱い。粘性普通。
- VI-2 暗褐色土 (10YR4/6) を多く含む。ソフトローム由来。ATブロックを少し含む。(ソフトローム)
- III 明黄褐色土 (10YR6/6) しまり強い。粘性弱い。(AT層)
- IX 浅黄褐色土 (10YR8/4) しまり強い。粘性強い。(白色ローム)
- X 明赤褐色土 (5YR5/6) しまり強い。粘性強い。(ハードローム)

人頭大の垂円礫または円礫が溶結して含まれる。丘陵西側斜面にのみ堆積する。

XII層：1区窯跡群周辺では橙色(7.5YR6/6)の粘質土層である。場所によって色調が異なるが、おおむね橙色から赤褐色を呈す。浅い部分では安山岩のクサレ礫を含むローム状の粘質土、深部は礫を多く含む固結度のやや高い埴土である。この層は溝口凝灰角礫岩層に相当し、浅い部分は風化によって土壤化したものと考えられる。含有礫は、クサレ礫化した安山岩や角閃石安山岩を中心に、結晶質安山岩、やや硬質灰色の安山岩、デイサイトなど、多様な火山岩類が含まれている。

その他、基本層序に統合されない部分的な堆積がいくらかみられる。これらについては、各遺構の記述の際に詳述するが、主だった特徴的な堆積について以下に触れておく。

1区平坦部の中央付近には、比較的広い範囲で縄文時代と古代の遺物包含層が形成されている。こ



II におい、褐色土 (7.5YR3/4) しまり普通。粘性やや強い。古代以降包層。φ1～3cm程度の炭を含む。
 III におい、黄褐色土 (10YR4/3) しまりやや強い。粘性やや強い。縄文包層。φ1～3cmの炭粒や焼土粒を含む。製炭土坑周辺 (D11・12グリッド) では炭粒・焼土粒を多く含む。
 Vb-1 暗褐色土 (7.5YR3/3) しまり普通。粘性普通。黒褐色土ブロックを多く含む。漸移層か。
 Vb-2 黒褐色土 (7.5YR3/1) しまりやや弱い。粘性普通。
 VI-1 褐色土 (10YR4/4) しまりやや弱い。粘性普通。暗褐色土ブロックを多く含む。ソフトローム由来土。
 VI-2 褐色土 (10YR4/6) しまり普通。粘性やや強い。A Tブロックを少し含む。(ソフトローム)
 VII 明黄褐色土 (10YR6/6) しまり弱い。粘性弱い。(A T層)。

第16図 2区南北土層断面図

れらは、1区丘陵斜面南端付近の小さな谷からの流水などによる水成堆積層で、シルトまたはグライ化した粘土で構成されている。堆積部分が南北に長い窪地地形となっているので、自然流路として扱った(「縄文流路」・「古代流路」)。1区谷底部分はこの範囲でしか遺物包含層を確認していないが、本来は全面に縄文時代の包含層と、弥生時代から古代の包含層が堆積していたと考えられる。棚田造成時の削平によって大半の土層が失われ、窪地の自然流路のみに遺物包含層が残存したものであろう。

また、VI層以外の基盤層にも部分的な水成堆積が見られる。上述の1区丘陵斜面南端付近の谷には、製鉄炉に伴う排滓場が形成されている。排滓場の基盤層はこの谷への流水によって形成された水成堆積層で、グライ化の進んだ灰色の粘土層や、有機物を含んだ黒色の粘土からシルト層で構成されている。これらの層の下にはVII層が存在するので、これが水成堆積層の主体的な母材となっているものと思われる。

2 遺跡周辺の地質(第17図)

本遺跡周辺は主に大山起源の火山碎屑物を中心とした様々な火山麓扇状地堆積物が複雑に分布している。こうした地質条件は、本遺跡のような生産遺跡の場合はその立地に少なからず影響を与えているものと考えられる。

先述のように、本遺跡が存在する支丘陵は溝口凝灰角礫岩層を基盤としている¹⁾。本支丘陵の西斜面以西や丘陵南方の開析が進んでいない部分には名和火砕流が分布し、東隣の丘陵には御来屋礫層が分布する。名和火砕流も御来屋礫層もそれを掘り抜いて窯を造るのは困難で、これらを基盤とする丘陵で窯を築こうとすれば表層のローム層やその流土層を掘削することになるだろう。しかし、ロームは耐火度が低く、窯体とするには不利と思われる。こうした点から、溝口凝灰角礫岩層の存在が窯築造にとっての規定的な条件となった可能性もあろう。さらに、溝口凝灰角礫岩層が埴質に富む風化土壌を含んでおり、かつそれが二次的な水成堆積物となって粘土化した層が遺跡内に分布することも、須恵器生産や製鉄炉構築に伴う粘土採集にとって大いに有利であったと考えられる。

また、鉄生産にとっても、周辺地域の地質条件が有利に作用している可能性が高いと考えられる。風化火山岩を多く含む溝口凝灰角礫岩層をはじめ、周辺には多様な火山岩を含む基盤層が複雑に分布する。火山岩、特に安山岩類にはチタン鉄鉱が多く含まれており、これらの岩石が風化し、流水による運搬作用を受けることで砂鉄の集積が形成される。周辺にはくずくし川をはじめとする無数の谷川や丘陵群の両側を流れる下市川・宮川の2つの中規模河川、さらに2kmほど東には流域面積の大きい甲川が存在し、いずれの河川でもまとまった量の砂鉄が採集できるほか、下市川・宮川の河口の砂浜にも砂鉄の集積層が見られる。このように、製鉄の原料である砂鉄を在地で確保する必要があった場合には、周辺の地質はその条件を満たしていたといえよう。

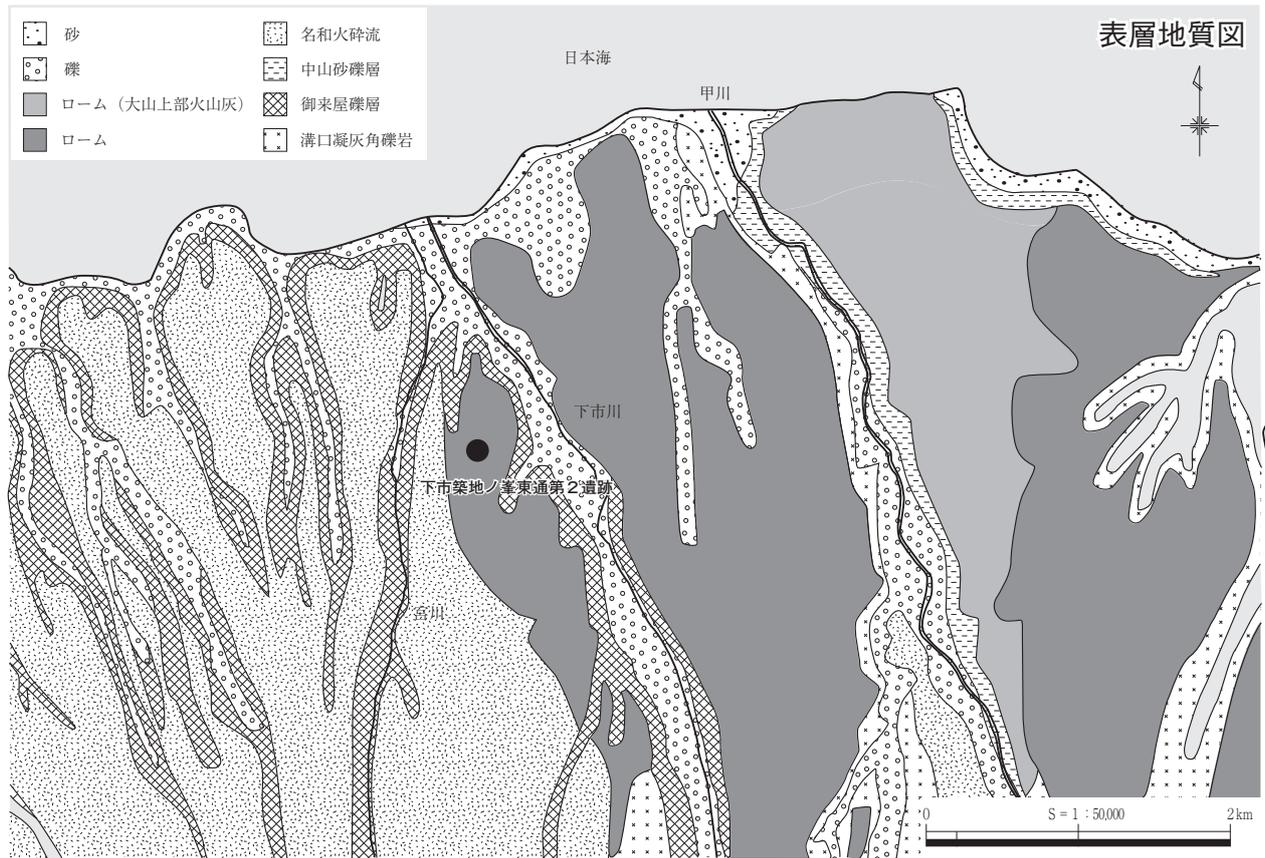
【註】

1) 地質図では、遺跡が存在する支丘陵も名和火砕流が基盤とされている。遺跡周辺にのみ局所的に溝口凝灰角礫岩層が露出しているのであろう。ちなみに、当然ながら石質火砕流の名和火砕流層よりも、溝口凝灰角礫岩層の方が風化しており、谷の開析が進みやすい。遺跡東側の谷の方が、西側の谷よりも深くて谷底が広く、谷川の規模が大きいのも地質条件によるものと言える。地質条件そのものが遺構立地の規定要素でないにしても、地質条件によって生み出された地形が遺構の立地に影響を与えていることは間違いないだろう。

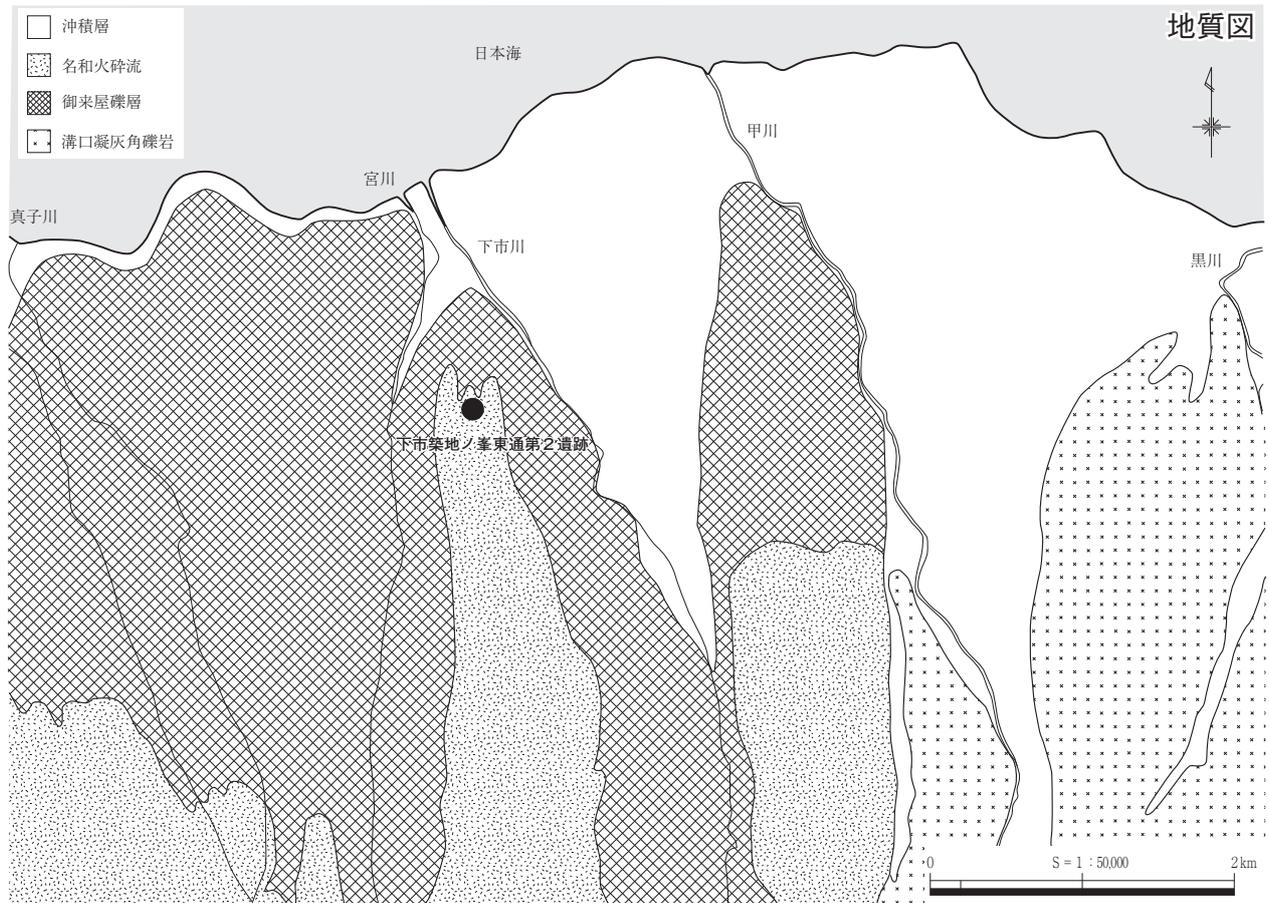
【引用・参考文献】

鳥取県1974『大山山麓開発地域土地分類基本調査 赤碕・大山』
 中山町誌編集委員会編2009『第一編 自然』『新修中山町誌』 大山町

第3章 遺跡の立地と層序



鳥取県 1974 「表層地質図」 「大上山麓開発地域土地分類基本調査 赤碕・大山」を基に作成



工業技術院地質調査所 1962 「5万分の1地質図幅 赤碕・大山」を基に作成

第17図 遺跡周辺の地質